

敦煌における多言語使用

高田時雄

京都大学人文科学研究所

目次

1 はじめに：漢人の植民都市としての敦煌

唐代に沙州と呼ばれた今日の敦煌は、甘肅省をつらぬいて長くのびる河西回廊の西端に位置している。その河西回廊は、瓜州（安西）、肅州（酒泉）、甘州（張掖）、涼州（武威）の各オアシスをつたって中国の中心部につながる。ここは中国と西域とを結ぶ東西方向のシルクロード幹線が中国に入ってくる入口にあたり、インド・イラン系の言語を話す西方の諸民族が古くから往来したであろうことは容易に想像される。敦煌の名はすでにプトレマイオスの地理書にも *Θροαυα* として見えるし、またオーレル・スタインが第二回探險で敦煌西方の見張り台から発見した、紀元四世期に書かれたとされるソグド文書簡（Ancient Letters）¹にも *drw”n* [Thurwan] という形で表記されている。その地名が本来何語に基づくものであるかはにわかに決定しがたいが、敦煌という漢語形は漢語以外の現地地名を寫したものである可能性が高い。

もともとこの地域は月氏（トハラ人）の故地であった。しかし彼らは漢の文帝（前一七九～一五七在位）の時代に匈奴の攻撃にあい西遷を餘儀なくされた。紀元前二世紀の末、匈奴に対して軍事的攻勢に出た漢の武帝は、河西回廊から匈奴勢力を一掃するとともに、河西の諸オアシスに積極的な植民を試み、その過程で敦煌にも郡が設置されたことは歴史に記載されている。おそらくは上記の敦煌の漢語形もこの時に成立したものであろう。それ以来、時代による消長はあったものの、この地が漢人の植民都市として存在してきたことは紛れもない事実である。そして中原王朝の支配力が弱まったときにはしばしば独立的な漢人地方政權の據点ともなった。したがって敦煌のもっとも主要な言語が、政治的にも社会的にも優勢な漢人の言語であったことは間違いない。その意味で敦煌の言語環境は中央アジアの他のオアシス

¹“Ancient Letters”の年代については諸説ある。ここでは最も新しい研究である F. Grenet & N. Sims-Williams, “The Historical Context of the Sogdian Ancient letters”, *Transition Periods in Iranian History, Actes du symposium de Fribourg-Brisgou* (22-24 Mai, 1985), (=Studia Iranica, Cahier 5; Louvain, 1987), pp.101-22.

都市と明らかな対比を見せる。敦煌の漢語がいかなるものであり、どのように推移したかについては後述する機会がある。

敦煌の交通史上に占める位置は、東西シルクロードの幹線上にあるというばかりではない。ハミを経て吐魯番盆地、さらには天山の向こう側の草原地帯にも通じていたし、河西回廊の肅州・甘州を經由してエチナ川流域のオアシスとも通じていた。これらの道筋は東西方向のシルクロード幹線に對しては南北の支線の位置にあるが、これら北方の地はチュルク語やモンゴル語を話す遊牧アルタイ系諸族の居住地域であり、彼らはこの道を通して南下してくることがしばしばあった。場合によっては彼らが農耕民として河西に定住することも実際にあったのである。また敦煌は黄河の上流域、今日の青海省ともつながっており、この地域に強固な地盤を築いていた吐谷渾の人々も敦煌と大きな関係を持っていた。

小文の意圖するところは、このような地理的位置を占める敦煌という地で、どのような言語情況が展開したかを、敦煌寫本を通して概観することである。敦煌寫本には年代に片寄りがあるため、考察の対象には自ずから制限があるのはやむを得ない。唐代以降、吐蕃期、歸義軍期が中心であって、十一世紀後半西夏の勢力下に入って以降は扱わないことをあらかじめお断りしておきたい。また寫本を資料とするために、書寫言語以外の言語の情況が十分に把握できないのも残念ながら致し方ないところである。

2 敦煌で行われた諸言語

2.1 ソグド語

上述のソグド語の手紙は東方に来ていたソグド人が故郷サマルカンドにいる主人や親せきに宛てて書いたものであった。このようにソグド人は早くから河西地方に根據地を築き、中國内地と交易を行っていたものらしい。池田温によれば、天寶十載（751）の差科簿に従化郷の名が見え、その住民はソグド人を主體とするものであったという²。彼らは敦煌の縣城の東隣に城壁を構えて集居していたらしい。その成立は初唐のころであるが、やがて漢人社會の中に埋没し、八世紀後半期に吐蕃が支配するころにはほぼ消滅したという。いわゆる敦煌寫本にはソグド文の寫本が50点以上残されているが、大部分が佛典である。これらは主として上記聚落の佛教徒ソグド人たちが用いたものと考えてよいであろう³。しかし話し手主體を失ってもソグド語自身はまっ

²池田温「8世紀中葉における敦煌のソグド人聚落」『ユーラシア文化研究』1965、49-92。

³Pelliot Sogdien 8 の末尾は康(x'n)姓のソグド人による回向發願文である。このことから、この寫本がソグディアナから持ち込まれたものではなく、中國世界に居住するソグド人によるものであることがわかる。また敦煌のソグド寫本には、紙背や卷末などに往々對應する漢語題名の記されていることがある。この事實も、寫本が作られた背景を暗示するものである。敦煌のソグド寫本の解説付リストは、吉田豊「ソグド語文獻」『敦煌胡語文獻』（講座敦煌6）、東京、1985、pp.187-204。を見よ。また敦煌に限らずソグド文獻の研究についての簡単な紹介は、やや古くなったが、David A. Utz, *A Survey of Buddhist Sogdian Studies* (=Bibliographia

たく消滅してしまっただけではない。九～十世紀の歸義軍期にもそれは用いられている。いわゆるチュルコ・ソグディアン（Turco-Sogdian）と呼ばれるものがそれで、恐らくはウイグル化したソグド人、あるいはソグド語の強い影響を受けたウイグル人によって使用されたものと想像される。ウイグル語的變容を受けたこの言語で書かれたテキストは、會計文書や手紙、落書きなどである⁴。十世紀の後期敦煌に來たコータン使節張金山（Cā Kim Śani）が自らの用いたコータン文寫本にソグド文字でサインをしているのは、一見奇妙な現象に見えるが、ソグド語がこの時期でも一定程度使用されていたことを物語っているものである⁵。

2.2 コータン語

コータン語の寫本で敦煌藏經洞から發見されたものは百數十點にのぼる。それらはいわゆる新コータン語（Late Khotanese）で書かれ、佛教文獻以外に、外交文書や報告書のたぐいなど世俗文書も相當數ある⁶。コータンはタリム盆地南縁のオアシスに據ったイラン系民族を主體とする國家であった。敦煌から遙かなたにあるこの國の言語が敦煌でしばしば用いられたとすれば、それは何らかの特別な事情がなければならない。十世紀の敦煌を支配した曹氏歸義軍政權はコータンの王家と姻戚關係を結び、相互に密接な關係を保持していたことが、敦煌におけるコータン語の存在をもっともよく説明する⁷。またコータンは唐の高宗（在位 649-683）の時に毘沙都督府が置かれて以來、實質的な中國支配下に入り、八世紀末に吐蕃の勢力が及ぶまで、ほぼ中國中原と變わらない行政制度がしかれていた。漢人の血を伝えるものもお少數ではなかったであろう。中國の文化傳統はこの國に深く根ざしていたのである。そのことも敦煌＝コータン間の繋がりを根底で支えるものであった。コータンから中原王朝に使節を派遣しようとするれば、必然的にコータンを經由しなければならない。曹氏歸義軍時期には、敦煌とは單に定期的な使節の往來にとどまらず、外交團を中心にしたコータン人のグループが常駐していたとしても不思議ではない。彼らは一定程度あるいはかなりな程度、漢語を理解したはずであり、コータン文字で寫された漢文佛典などは、こうしたコータ

Philologica Buddhica, Serie Minor III), Tokyo, 1978 が有用。

⁴Nicolas Sims-Williams et James Hamilton, *Documents turco-sogdiens du IXe-Xe siècle de Touen-houang* (1990, London) はその種のテキストの集成である。

⁵張金山のソグド文字による名前は Jātakastava (Stein, Ch.00274) の colophon および Siddhasāra (Ch. ii, 002) の欄外に見える。

⁶敦煌發見の寫本も含めたコータン文獻全體の概要は、熊本裕「コータン語文獻概説」『敦煌胡語文獻』(講座敦煌6)、東京、1985、pp.101-140、とくに英語では Ronald E. Emmerick, *A Guide to the Literature of Khotan*, Second Edition thoroughly revised and enlarged (=Studia Philologica Buddhica, Occasional Paper Series, III), Tokyo, 1992 が新しい情報を與える。

⁷敦煌發見のコータン文獻すべてを十世紀に置こうとする考えは、張廣達・榮新江「關於敦煌出土于闐文獻的年代及其相關問題」『于闐史叢考』、上海、1993、pp.98-139 を見よ。

ン人の手になるものでなければなるまい⁸。敦煌に行き來するコータン人のためのものと思われるコータン・漢語文例集も見つかっている⁹。

2.3 サンスクリット

敦煌にサンスクリットを話す社會集團が存在したとは思えない。しかし敦煌のみならず、河西オアシスにはインドからやって來る佛教僧が滞在することがよくあった。とくに宋初には北西印度にイスラム勢力が侵入し、佛教が危機に瀕したことで、宋の太祖・太宗が熱心に佛教を奨励したこととあいまって、インド僧の中國渡來は一層數を増したのである。中國には文殊菩薩の示現する聖地五台山があり、それも彼らを惹き付ける理由であったと想像される。ペリオ・コレクションの中で、サンスクリット・チベットの對譯佛教語彙集はジョゼフ・アッカシ (Joseph Hackin) により、早くに紹介されたものであるが、これは十世紀末、正に五台山に巡禮したインド僧デーヴァプトラ (Devaputra) により肅州で口述されたものである¹⁰。こうしたインド僧は當然サンスクリットを用いたに違いないが、反面、敦煌の佛教寺院でもインド僧についてサンスクリットを學習するようなことがあったものと思われる¹¹。またやや時代をさかのぼる吐蕃期には、チベット僧によってサンスクリット經典研學の風氣が移入されたことも想像される。翻譯名義大集 (Mahāvīyutpatti) がチベットで編纂されて後まもなく敦煌に傳わっていたらしいのは、恐らくそれを裏付けるであろう¹²。名義大集はごく一部分の斷片ではあるが吐蕃期の寫本の紙背に残されている¹³。[資料1] 十世紀後半、中國にやってくるイ

⁸コータン文字轉寫金剛經 (Ch. 00120 of the Stein Collection). 1937年のF.W.Thomasによる紹介以來、幾つかの論文がこの寫本をみついているが、ここでは最も最近の成果である Ronald E. Emmerick and Edwin G. Pulleyblank, *A Chinese Text in Central Asian Brahmi Script*, Roma, 1993 (=Serie Orientale Roma, LXIX) のみを挙げておく。関連文獻は同書中に見える。

⁹Or. 8212.162、P.2927 Verso および S.5212 Verso. 高田『敦煌資料による中國語史の研究』、東京、1988、pp.196-197を見よ。

¹⁰Joseph Hackin, *Formulaire sanscrit-tibétain*, Paris, 1924.

¹¹ペリオ・サンスクリット1號は開寶四年(九七一)十月二十八日の漢文刊記を有する梵文陀羅尼刻本である。その陀羅尼の末尾にはサンスクリットでコロフォンが附され、およそ「Satraya 大學校の教師グナ・ギラが書いた」と讀める。(Wu Chi-yu, *Quatre manuscrits sanskrits de Touen-houang*, in *Contributions aux Etudes de Touen-houang*, Vol. III, p.69.) このサンスクリットのコロフォンが曹氏歸義軍期の敦煌寺學で書かれたとする見方がある。(高明士「唐代敦煌的教育」『漢學研究』4-2 (1986) p.270) もしそうだとすれば、インド僧が敦煌で佛學の教授に当たっていたという具體的な證據ということになるが、果たして如何なものであろうか。むしろ、これは翻刻の底本となった陀羅尼の末尾にもとから付けられていたコロフォンであり、敦煌とは直接の関係がないとするのが正しいと思われる。

¹²Giuseppe Tucci は Mah 計 yutpatti の編纂開始年を 814 年とする。The Tombs of the Tibetan Kings, Roma (=Serie Orientale Roma, I), 1950, p.18. 山口瑞鳳「吐蕃王國佛教史年代考」『成田山佛教研究所紀要』第三號、1978, p.17 ではその成立を 814 年とするが、同『二卷本譯語釋』研究』『成田山佛教研究所紀要』第四號、1979, p.12 では 814 年より「少し以前」とする。

¹³P.t.1261 Verso. この寫本の Recto は藏漢佛教對照語彙で、漢語は玄奘譯瑜伽師地論から採られた(その 13-20、31-34 卷から)ものである。しかしチベット語は今日の Tanjur に含まれる對應箇所とは往々にして譯語が一致しない。Verso に齋儀の僧尼のリスト (lists) が書かれ、Mahāvīyutpatti の斷片はこれらリストの中間に書かれている。Cf. Li Fang-Kuei, *A Sino-Tibetan Glossary from Tun-huang, T'oung Pao*, XLIX (1962), 233-356. また Recto

インド僧が増加すると、彼らと會話を交える機会が増えるのは當然である。沿道にあたるコータンでは仲介に立つものが多かったと想像される。そのためにサンスクリットとコータン語のバイリンガル・テキストが書かれている¹⁴。熊本裕 (Kumamoto Hiroshi) はこれを「西域旅行者用サンスクリット=コータン語會話練習帳」と呼んでいる¹⁵。興味深いのは、このマニュアルは實際に中國に赴くインド僧に就いて編纂されたいのだが、當のインド僧がやはり五台山を目指していることである。

2.4 ウイグル語

十世紀歸義軍政權の曹氏は、交易立國の條件を確保するためコータンともそうであったように甘州のウイグル國と一再ならず姻戚關係を結んで友好關係を保つことに努めた。そういった關係もあり敦煌にはウイグル人の居住するものが少なくなかったと思われる。さらに十一世紀になって東方から西夏の壓力が及んでくると甘州ウイグル國から西方の敦煌地方へウイグル人が移動するものも少なくなかったであろう。またこの頃には西ウイグル國の領域内からの移住者の存在も無視できないくらいに大きくなっていったと思われる。いずれにせよ滔々として流入するウイグル人の勢力は次第に敦煌の曹氏をして單なる傀儡政權たらしめ、彼らが實質的に敦煌の權柄を握ることになった。一〇一四年遼に遣使した曹賢順がすでに「沙州回鶻」と呼ばれているように、敦煌はもはや漢人の手から離れウイグル人のヘゲモニー下に置かれるようになっていく。このような歴史狀勢を考えると¹⁶、敦煌におけるウイグル語の使用は十世紀の後半期からいよいよ盛んになっていったはずである。その勢力は漢語に匹敵し、やがて漢語を凌ぐようになっていったとも想像できるであろう。しかし藏經洞から出土したウイグル文寫本は佛典や占書、格言、手紙など五十點ほどを数えるものの¹⁷、その数が決して多くないことからすると、この時期のウイグル人社會における文字使用がなお低調であったといえるかもしれない。しかし藏經洞に保存された寫本には言語による片寄りがあって、實際にはかなり異なった情況が展開していたかも知れない。したがってこれはなお軽々には豫斷を許さない問題である。このあたりが、文獻資料からの

のグロツサリーは筆跡から吐蕃期の大徳法成その人の手控えであると考えられている。上山大峻『敦煌佛教の研究』、京都、1990、p.238。法成自身もまたサンスクリットを研究したらしく、サンスクリット文法綱要を譯し、講義にも用いている。上山同上書 pp.152-154, 180-182。

¹⁴Pelliot 5538. Recto はコータン王 Viśa' Śūra (在位 967-978) から沙州の大王 Ta-urang 曹元忠 (在位 944-974) に宛てられた公式書簡で、同コータン王の治世四年 (970) に書かれている。

¹⁵熊本裕「西域旅行者用サンスクリット=コータン語會話練習帳」『西南アジア研究』No.28 (1988), 53-82。

¹⁶森安孝夫「ウイグルと敦煌」『敦煌の歴史』(講座敦煌2) 東京、1980、pp.299-338。

¹⁷そのうち主要なものはほぼ James Hamilton, *Manuscripts ouïgours du IXe-Xe siècle de Touen-houang*, 2 tomes, Paris, 1986 に網羅される。また森安孝夫「ウイグル語文獻」『敦煌胡語文獻』(講座敦煌6)(東京、1985)の第二節「敦煌藏經洞出土の古代トルコ語(ウイグル語)文書」(pp.15-36)を見よ。また Hamilton、森安兩氏の研究を受けて書かれた楊富學・牛汝極『沙州回鶻及其文獻』蘭州、1995 もある。

み言語史を組み立てようとする場合の限界である。敦煌寫本中には、いわゆる藏經洞以外から発見されたモンゴル期・元朝期のウイグル文獻も相當數存在するが¹⁸、ここでは扱わない。

3 チベット語と漢語の併用

3.1 チベット支配期の影響

以上、敦煌に行われたいくつかの言語について概観したわけであるが、文獻からはその影響の程度を推し量り得ないウイグル語を除き、敦煌の漢語世界に本質的かつ永續的な影響を與えたものはチベット語である。敦煌は七八六年から八四八年までのあいだチベットの軍政下に置かれたため、敦煌の住民はこの間さまざまな局面でチベット語との接觸を餘儀なくされた。支配者の言語がチベット語であってみれば、行政のさまざまなレベルでチベット語を用いねばならない場合が多かったことは容易に想像される。チベット官吏と漢人のあいだを仲介する通譯は當然必要になったであろうし、片言のチベット語は次第に敦煌の漢人住民のあいだに浸透していったと考えることも自然である。とくにチベットの官衙ではたらく漢人にはチベット語の知識、とりわけ文書行政のための書寫チベット語の能力が要請されたと考えられる。吐蕃期の敦煌寫本の中に、しばしば見られる習書の多くがこうした行政関連文書の書き出し部分であるのは、この想像を裏付けるものである。契約文書は当事者が漢人であっても、チベット語で作られることがあったし、漢文の文書であってもサインはチベット文字であったりチベット文字の印章が用いられていることがよくある¹⁹。

また吐蕃期には當然のこととして漢文文書の中にチベット語の語彙が現れる。それはただちには翻譯の困難な、乞利本 (khri-dpon “10,000 district official”) や節兒 (rtse-rje “chief lord”) といった官職名や、悉董薩 (Stong-sar)、曷骨薩²⁰ (Rgod-sar) などの部落名にとどまらず、たとえばチベット語 lag-yig “finger-seal” を示す「洛易」などの語も用いられている²¹。反対にチベット語文書の中にも大量の、むしろずっと多い数の漢語が現れる²²。幾つかの藏漢對譯語彙集の斷片が敦煌遺書中に残されているのは、當然こうした二言語のあいだを取り持つための道具としてこうしたものが必要とされたからである。

¹⁸藏經洞以外から出た敦煌寫本については、上掲の森安「ウイグル語文獻」pp.3-13, 37-98 を見よ。

¹⁹チベットの契約文書については、T. Takeuchi, *Old Tibetan Contracts from Central Asia*, Tokyo, 1995 に詳しい。

²⁰曷骨薩の最初の文字は寫本により紇であったり阿であったりするが、いずれにせよ韻尾が-r(j-t)の文字が選ばれている。阿もこの場合は-r で終わる入聲であった。

²¹P.3730Verso-7、末年(839)四月の「曷骨薩部落百姓吳瓊岳便粟契」。lag-yig については、T. Takeuchi, op. cit., p.110ff. を参照。

²²deb tse (磔子), ”an pan (鞍鞞) etc. いまいちいち例を挙げない。たとえば F.W. Thomas, *Tibetan Literary Texts and Documents concerning Chinese Turkestan*, Part II, London, 1951 を見よ。そこには未だ未比定の漢語語彙にしばしば遭遇できる。

全部チベット文字で書かれた S.2736, S.1000、チベット文字と漢字を用いた P.t.1263(=P.ch.2762) は早くに紹介されよく知られているので²³、ここではこれまであまり言及されていない小断片を出しておこう。[資料2]さらに十二支の藏漢対照も挙げておく。これは紀年のために日常必要とされたものであろう。[資料3]

チベット支配から脱却した後も、九・十世紀の河西や中央アジアでは、チベット語のステイタスは相変わらず高く、この地域の外交用語としてしばしば用いられた²⁴。上に触れたコータン語と漢語の対訳文例集の中には、同じ寫本中にチベット語・漢語文例集の書かれているものがあり、さらにチベット文の例の中にコータン語の単語が混じっていることなどを考えると、明らかにコータン人の使用したものである²⁵。とすれば、この資料も十世紀におけるチベット語の国際性を示すものと言えよう。

3.2 寫經事業

チベットのツェンポ (btsan-po) Khri-gtsug lde-brtsan (在位 815-841²⁶) の時代に、その發願によって大規模な寫經事業がチベット全土で展開された。チベット支配下にあった敦煌も例外ではない。おそらくは總勢千人以上に上る人数の住民が徴發されて、寫經に従事したと思われる。寫經の対象となったものは、主としてチベット文の Tse dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo (Skr. Aparimitāyur-nāma-mahāyāna-sūtra)、その漢譯『無量壽宗要經』、そして漢文の玄奘譯『大般若波羅蜜多經』(Taisho No. 220) と對應するチベット文の Shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag brgya pa (Skr. Śatasāhasrikā-prajñāpāramitā (Tohoku, No.8) であった。これらの寫經には書寫した人物や校正に当たった人物の名前が書かれているのが普通である。それによると、漢文經典の書寫が漢人の手になるのは當然として、チベット文經典の場合にも名前から判断して漢人が大多数を占めていることが注目される²⁷。敦煌の人口比率からすれば、これは無理からぬこととすべきであるが、チベット文經典の書寫が出来る程度にはチベット文字を識っていたことが前提となろう。反対から言えば、この寫經を通じて多くの漢人住

²³S.2736, S.1000 に関しては、高田前掲書、p.195ff.を見よ。P.t.1263(=P.ch.2762V) は、Pelliot, Histoire du Tibet (=Œuvres posthumes de Paul Pelliot, V), Paris, 1961, pp.143-144 で紹介された。これらはすべてチベット支配期のものと見てよい。最後のものは Recto に歸義軍期の「張淮深修功德記」が書かれているが、これは Verso の語彙が先に書かれたもので、チベット期のものと考えられる。

²⁴Géza Uray, Emploi du tibétain dans les chancelleries des états du Kan-sou et de Khotan postérieures à la domination tibétaine, *Journal Asiatique*, CCLXIX, fasc.1/2, pp. 82-90.

²⁵S.5212 Verso. 高田前掲書、p.196 参照。

²⁶在位年については諸説あり。いま上掲山口瑞鳳「吐蕃王國佛教史年代考」p.18ff.による。

²⁷寫經の人名については、西岡祖秀「ペリオ蒐集チベット文『無量壽宗要經』の寫經生・校勘者一覽」『印度學佛教學研究』33-1、1984、314-320；同「沙州における寫經事業」(講座敦煌6)、東京、1985、pp.379-393；上山大峻「吐蕃の寫經事業と敦煌」『中國都市の歴史的研究』(=唐代史研究會報告第VI集) 1988、190-198；上山上掲『敦煌佛教の研究』p.440ff.などを見よ。

民がチベット文字を修得したという側面もあったに違いない。いずれにせよ、この寫經事業の遂行にはチベット政府は強壓をもって臨んだから²⁸、否應なくチベット文字は漢人社會に浸透したことと思われる。チベット文『大般若波羅蜜多經』寫經の場合、寫經所では寫經者各人は寫經用の用紙とは別に、同じ大きさの自分用の用紙一枚を貰うことが出来た。下敷き用か、あるいは埃除けか、本来の用途は分からないが、これを glegs tshas と稱した。glegs tshas にはしばしば所持者自身がたとえば「bung tse-weng の glegs-tshas である (bung tse-weng gi glegs-tshas lagso) (P.t.1155) のように書いているのでそれとわかる。この glegs tshas には、チベット語で經文の切れ端や、手紙の書き出しや、借用書などが書かれていることが多い。寫經の暇を盗んで、こういった文章の練習をしたものと見える。したがって彼らは単に機械的にチベット文字を寫していただいただけではなく、チベット語の知識もかなり持ち合わせていたことが窺われるのである。

この政府による寫經事業とは比べるべくもないが、小規模な寺院単位での寫經も行われていたようである。たとえば漢文『金有陀羅尼經』一卷には、形式を同じくする寫本が數十點残されているが、その末尾には必ず書寫人の名前がチベット文字で記されている。その人名を見ていくと、Bam kwang (汜廣)、Cang si ka (張寺加²⁹)、Deng ”eng tse (鄧英子)などは『無量壽宗要經』(漢あるいはチベット文)の寫經者にも名を列ねているのがわかる。またこの經のうちの五點には「三界」(sam ke)と書かれてあることから、政府の寫經事業とほぼ同時期に三界寺で行われた寫經であろう。ともあれ、ここでも漢文寫經にチベット文字でサインをしていることは注目しておいてよい。

3.3 寺院

當時の精神界を支配していた佛教についていえば、チベットによる河西地域の支配が、チベット佛教と中國佛教が直接にぶつかりあう局面を生み出したことは大きな意味を持っている。佛教の社會的な地位と影響力を考えると、寺院でチベット佛教が研究され、チベット語が用いられることは、一般の風氣に與える影響を無視できないのである。この時期のチベット佛教研學の第一人者が法成 (Chos grub) である。法成は俗姓呉の漢人であり³⁰、吐蕃期の敦煌に生を受け、漢語・チベット兩語に通じて、この二つの言語で大量の著作および翻譯を行った。彼は敦煌の佛教界の頂点をきわめ、三藏法師の稱を與えられている。彼の學派中にはチベット文に通じた僧侶もいたことが分

²⁸寫經の組織および遲滯時の處罰に関わる文書 (Ch. 73, XV. 5; Vol. 69, foll. 53-56) が残されている。西岡祖秀「沙州における寫經事業」(講座敦煌6)、東京、1985、pp.379-393。他にも寫經の割當名簿などが何點か存在する。

²⁹張寺加はまた張似嘉とも、張寺嘉とも書かれ、漢文文書にも頻見する。鄭炳林『康秀華寫經施入疏』與『ム和尚貨賣胡粉曆』研究』『敦煌吐魯番研究』第三卷、1998、pp.196。を参照。

³⁰法成がはたして漢人であったか、チベット人であったかは説の分かれるところである。しかしここでは上山大峻の説得的な意見に従うのを妥當とする。上山『敦煌佛教の研究』p.92ff.

かっている³¹。その餘風はまた在家にも及んでいたらしい。P.tib.336 は藏文の cintāmani-mantra であり、“cang gtsug legs gyis bris” とあることで、張 gtsug legs の書写にかかることがわかるが、さらに背面に漢字で「宋判官經」とするから、この漢人の所持する經典であったことがわかる。

3.4 藏漢バイリンガルの社會集團の形成

チベット支配の影響が極まるどころ、やがて藏漢バイリンガルの社會集團が形成されるに至る。敦煌の漢人の中にはネイティブの漢語のみならず、自由にチベット語を話し、読み書きするような人々が現れたらしい。そういったいわばチベット化した漢人たちが集って「社」を組織していたのではないかと見られる材料がある。ただこの社がチベット語使用を機縁にして組織されたものであるのか、またはその社の成員の多くにたまたまチベット語使用が便利な状況であったためなのかは分からない。いずれにせよ漢人地域社會の基礎をなす「社」のレヴェルにまでチベット語が浸透していたことはきわめて注目に値する。今までのところ、チベット文の社條と思われるものが二點見つかっている。そのうちの一点(Ch.73.xiii.18)には、社長(zha co)の dze y i shi(齊施?)以下、社人(zha myi³²)十名が押字しており、その構成員はすべて漢人と思われる。残念ながら主部を欠くため、條文の全體はあきらかではないが、社條に違背した場合の處罰規定などほぼ漢文の社條に見られるような條項が書かれている。またもう一点のほうにも漢人としい名が二三擧がっている(P. t. 1103)。さらに漢文の社司轉帖の背面に、持ち寄った物品のリスト(いわゆる收贈曆)をチベット語で書いたものも存在している(P. t. 1102)。これも社におけるチベット語の使用を確認する補助資料となるであろう³³。

チベット語の社文書はチベット支配期のものであるが³⁴、この時期に形成された藏漢バイリンガルの社會集團は歸義軍期においても存続したようである。というのは姓を五音によって分類することで吉凶を説く「五姓」に関わるチベット寫本が存在しており、(『人姓五音歸屬經』)これは十世紀のものと考えられるからである³⁵。五姓説は漢人あるいは餘程漢化の進んだ人々以外には必要のないものであり、おそらくはチベット語の影響を強く受けた漢

³¹法成の講筵に列した法鏡が筆録した講義録には隨所にチベット語の書き入れが見られるという。上山『敦煌佛教の研究』p.181。

³²漢語「社」(zha) + チベット語 myi “人”のアマルガム。

³³高田時雄「藏文社邑文書二三種」『敦煌吐魯番研究』第三卷、1998、pp.183-190。

³⁴筆者は以前、音韻的特質から Ch.73.xiii.18 の社條を十世紀のものではないかと考えたことがある。Bouddhisme chinois en écriture tibétaine: Le Long Rouleau chinois et la communauté sino-tibétaine de Dunhuang, in *Bouddhisme et cultures locales, quelques cas de réciproques adaptations*, Paris, 1994, p. 144. しかし音韻的特質からのみ判断するのは妥当性を欠く面があり、現在ではやはりチベット支配期のものと見なすべきであると考えているので、ここで撤回を表明しておきたい。

³⁵高田時雄「五姓を説く敦煌資料」『國立民族學博物館研究報告』別冊十四号、1991、pp.249-268。

人が用いたものである。こういった材料からも藏漢バイリンガル社会の一面を窺うに足るが、少なくともチベット文字の使用に關してのみは十世紀の後半まで確認できる。

3.5 藏漢バイリンガル・テキスト

チベット支配期を通じてチベット文字・チベット語が敦煌の漢人社會に深く浸透してくると、一部の人々のあいだに漢語を表記するのも漢字を用いなくて、チベット文字で書く習慣が次第に出来上がってくる。その結果としてさまざまな種類のチベット文字轉寫漢語テキストが今日に残されることになった。それにはだいたい以下のような種類がある³⁶。

佛經（金剛經、阿彌陀經、法華經普門品、天地八陽神呪經、般若心經）

曲子・詩（對明主鄭郎子辭、遊江樂泛龍舟；寒食篇）

教理問答など（菩提達磨禪師觀門、大乘中宗見解、「長卷」）

佛教讚歌（道安法師念佛讚および南宗讚、辭道場讚など「長卷」中のもの）

童蒙書（九九、雜抄、千字文）

まず時代から言えば、これらのテキストが書かれたのは吐蕃期のみならず十世紀の曹氏歸義軍期にまで及んでいることが特筆される。佛經には吐蕃期のものと歸義軍期のものとがあり、かなり明瞭な音韻的特徴の違いを見せるので、それ自身興味深い推論が可能になるが、それは次節で述べよう。曲子や詩は吐蕃期の寫經所において glegs tshas 上に書かれたものが主で、退屈な寫經の合間に口ずさみつつ手寫したものと思われる。一種の落書きであり、こういった背景がなければ恐らくわざわざ書き留められることはなかったであろう[資料4・5]。教理問答など初學のための佛教入門や讚歌は、僧院において佛僧が日々の修行に用いたものである。チベット文字轉寫漢語テキストの中で最長のロンドン本「長卷」は主として教理問答と讚歌からなり、その内容と音韻的特質から判断して、十世紀の僧院で用いられたものであることは間違いない。どういう譯か、吐蕃期には佛經のみで、この種の僧院内での生活を反映するようなテキストは見つかっていない。童蒙書のうちで、雜抄³⁷は詩詞と同じく glegs tshas 上に見られるもので吐蕃期のもの。同じく千字文

³⁶ これらチベット文字で書かれた漢語テキストの多くは、高田時雄『敦煌資料による中國語史の研究』（東京、1988）に収録。「長卷」は、高田時雄「チベット文字書寫『長卷』の研究」（本文編）、『東方學報』（京都）第六五冊（一九九三）pp.313-380, 14pl. を見よ。また South Coblin, Two Notes on the London Long Scroll, Bulletin of the School of Oriental and African Studies, LVIII, 1995, 105-108 は「長卷」の Recto ll. 73-83 を S. 5809 により、Verso l. 44 を P.2066 によって同定したもので、高田の不備を補う。

³⁷ 「雜抄」の何たるかについては、那波利貞「唐抄本雜抄考」『支那學』10, 1932（のち同『唐代社會文化史研究』（東京、1974）、pp.197-268 に再録）、また周一良「敦煌寫本雜抄考」『燕京學報』35(1948)、205-212（『周一良集』第三卷、pp.271-9 に再録）を参照。

(Ch. 86. II, back; 音注本の千字文 P.1046 とは異なる) も吐蕃期のものである。それに對して九九は裏面にコータン國の使者劉司空の名が見えるチベット文書で、明らかに十世紀の歸義軍期に屬する。

重要なのは、チベット支配期に成立したチベット文字で漢語を寫す傳統が十世紀の曹氏歸義軍期に至っても保持されている點である。もちろんチベット人の勢力が敦煌から一掃されて以降は、チベット語・チベット文字を用いねばならない政治的な壓力は消失したはずである。しかし一旦出來上がった習慣はそう簡単には解消されないものであった。この傳統はあるいは漢字の學習から疎外された社會階層によって保持されたということも考慮しなければならぬかも知れない。しかし今の所そういった面を證明し得るような材料は存在しない。

4 敦煌の漢語

冒頭に述べたように、敦煌は漢代以來の長い傳統を持つ漢人の植民都市であった。その長い歴史のあいだに独自の方言が形成されたとしても決して不思議ではない。とくに敦煌がしばしば中原の王朝から政治的に切り離されることがあったことを考慮すればなおのことである。ただ入植者の多くは甘肅あるいは陝西あたりの隣接地域からが多かったであろうから、敦煌の漢語方言が廣義の西北方言に屬したことも容易に想像される。事實、上に挙げたチベット文字轉寫テキストの音形を分析すると、唐代の沙州の漢語が西北方言の特徴を備えていることも早くから指摘されてきた。しかしチベット支配期以前の唐代の敦煌は、同時代の中國各地がそうであったように、中央の制度文物に色濃く染め上げられていた。中央から派遣される官僚は都長安の規範的な言語を話した筈である。學校においても經書の讀音は中央の規範音で讀まれねばならなかった。首都長安自身が地理的には西北方言區に屬したために、若干説明が複雑になりかねないのだが、唐王朝の雅言としての標準語(それをもっともよく體現するのは後世の官話と同じく官僚層の言語であったろう)は長安の土着の方言とは一線を畫していたと考えるべきである。長安でも違いがあったとすれば、敦煌では標準語と土着の方言との差違は一層際立ち、強く意識されていたと想像できる。その場合、敦煌の方言(河西方言³⁸)は多くの土着敦煌人の母語であるに関わらず、公式の場では認知されない地位にとどまらざるを得なかった。ところが、848年張議潮が漢人のヘゲモニーを回復してのちの敦煌は、事實上の獨立國家であり、中原との連絡も次第に希薄になっていき、それにつれて敦煌方言の地位は相對的に向上し、表舞台に現れてくる。とくに十世紀の曹氏歸義軍時期になると、敦煌方言が獨立敦煌國の標準語であるかのようになったものと思われる。上で少し觸れたよう

³⁸敦煌の方言は決して孤立したものではなく、河西一帯に同質の方言が分布していたらうと考えられる。河西方言の語はそれを指すのに用いている。高田上掲書の第一節「九・十世紀の河西の歴史狀勢と河西方言」(pp.5-8)を見よ。

に、佛經のチベット文字轉寫を見ると、チベット支配期乃至歸義軍初期のものは都の標準音あるいはそれに極めて近いカタチであるのに對して、歸義軍後期のものには明らかな河西方言の特徴が見て取れる。即ち、唐代及びチベット支配期の寺院では誦經に標準音を用いていたものが、歸義軍期になると土着音で誦し始めたと考えられるのである。これは敦煌において漢語の規範が變化したことの如實な現れである。しかし注意すべきは、土着の敦煌方言は一貫して存在した筈であり、唐代～チベット支配期にも敦煌の人々のあいだで日常用いられていたことは當然である。ただ認知度の低さのゆえに資料に反映されることがほとんど無いだけなのである。2-4に引いた社條に見える人名の對音は敦煌方言の音形を露呈している。そのために一時時代判定を誤ったという経緯もある。しかしこれは佛經でもなく詩詞でもなく、讀書音を用いる必要のない場合であり、そのため日常の音が現れたと見られ、その意味ではかえって貴重な例というべきであろう。

5 結び

冒頭に述べたように、敦煌は漢代以來總體として漢語を話す漢人の世界であった。シルクロード上の結節點に位置していたために、多くの民族が往來し多言語世界が展開したのも事實である。しかし漢語が優勢であることに變わりはなかった。しかし八世紀の八十年代から九世紀半ばにかけてのチベット支配はその漢語世界に深甚な影響を及ぼすことになった。その後、歸義軍政權のもとで漢文化が再生し、それにともない漢語河西方言が敦煌の有力な言語として登場する。ただそれも一時の夢のようなものであった。資料的に裏付けることは難しいが、十世紀末にウイグルが次第に勢力を伸ばして以降は、しだいに漢語は衰微し、やがてウイグルやモンゴルその他の言語の中に埋没していったと思われる。西夏・元・明時代を経て紆余曲折はあったが、周知のとおり、今日の敦煌はまたほぼ完全な漢語社會に戻っている。この状況は雍正乾隆以降の新たな植民によって形成されたものであって、邊境の言語の生存が政治情勢の變化によって左右されるという好例を提供している。清朝以前の敦煌の言語状況を推測させるような資料はきわめて乏しい。それに對して十一世紀以前の言語情勢は幸い敦煌藏經洞發見の多數の寫本が存在することによっておおよその概観を得ることが出来る。小文はその初歩的な試みであるが、紙數の関係で、個々の資料の背景に細かな検討を加えることが出来なかったのは遺憾である。